

第2章

京都大学大学文書館および学術情報メディアセンターに関する報告

加藤 直子 総合研究大学院大学 全学事業推進室

京都大学大学文書館および学術情報メディアセンターを訪問した。以下はその報告書である。

訪問日：2005年3月10日（木）

※展示物の写真撮影は禁止されているため、貼り込んである写真・図はすべて京都大学大学文書館HPもしくは京都大学学術情報メディアセンターHPより転載したものである。

1. 京都大学大学文書館

京都大学大学文書館は、2000（平成12）年11月1日、京都大学の歴史に関する各種の資料の収集、整理、保存、閲覧及び調査研究を行うことを目的とし、設置された。本格的な大学文書館としては、全国で初めての組織である。

正門を入ってすぐの百周年時計台記念館内に位置し、企画展、常設展を行う展示室のほか文書館所属の各教員の居室や事務室および書庫が配置されている。展示の見学は無料となっており、記念館内のフランス料理店の利用とあわせて、近隣住民の憩いの場ともなっている。

職員組織は、館長1（兼任）、教授1（兼任）の他、専任の助教授1、助手2、アルバイト1である。実質的管理・運営は西山伸助教授の指揮のも

とに行われている。当日は、西山助教授より京都大学大学文書館の業務について、特に資料の収集・整理・公開に関すること、および展示について説明を受けた。

1.1. 資料の収集と整理について

京都大学大学文書館が収集する資料は、以下の4つに大別される。

- ① 法人文書（京都大学の職員が職務上作成する会議議事録、人事関係資料など）
- ② 個人資料（京都大学関係者の個人的な書簡・メモ・講義ノートなど）
- ③ 写真・図版類
- ④ 刊行物（京都大学各部局で刊行された定期刊行物、教育研究に関する報告書、調査統計資料など）

上記資料の目録は現地にて閲覧できる上、京都大学大学文書館ホームページでも公開されている⁽¹⁾。目録で探した必要な一次資料については、閲覧が可能である。各資料のうち、③を除く資料の収集・保管方法について、具体的に説明を受けながら見学した内容を以下に記す。

1.1.1. 法人文書

法人文書の所蔵には、地下1階書庫が利用されている。この書庫に限らず、書庫はすべて非公開であり、入室にはカードキーが必要である。現在の京都大学の前身の1つとなった第三高等学校関係資料（刊行物）の保管にもこの書庫が当てられている。

この部屋は、上にフランス料理店が位置することからも分かるように、もともと書物や文書の保管のために設計されたものではないため、防火対策にはスプリンクラーが使用されている。保管資料はすべて紙ベースであることから、書庫としてはかなりリスクが高いといえよう。消防法に従い、天井と書棚間の空間を確保するため、各書棚の高さは150cm程度と比較的低い。低い書棚は収納量が減る反面、女性スタッフにも扱いやすいという

メリットがある。軽量であることを生かし、また機械トラブルを避けるため、あえて電動ではなく手動式の書架が採用されている。



【写真1】 帝国大学時代の資料

年代が進むにつれ書棚が一杯になる。収容量の予測を誤った場合、書棚に入り切らなくなる、あるいは逆に無駄なスペースを残す危険が生じる。こういった理由から、項目別の配架方法から年度別配架方法への変更が予定されている。

資料の電子化については今のところほとんど着手されていないが、マイクロ化については損傷の激しい資料や利用頻度の高いものから順次行っている。マイクロ化は外注で、費用は1コマ35円程度である。

この書庫には、大学の運営に関する各種会議の議事録・人事資料などが項目別にファイリングされ、年度を問わずその項目毎に配架されている。この資料配架方法では、あらかじめスペースを確保しておかないと

大学の歴史資料としての議事録を考えた場合、文書館側から望ましい議事録の記録方法を示すなど、標準化を図ることが必要といえよう。西山助教授によれば、議事録には決定事項のみならず、議論の詳細が記述されていることが望ましい。つまり、大学の教育・研究そして運営の実態をより鮮明に残すためには、決定事項に関する代案の有無などの記録が必要になる。しかしながら現在のところ、その指導・推進には至っておらず、今後の課題という



【写真2】 現在の資料

ことである。

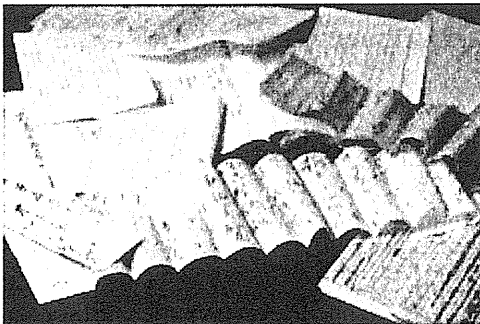
1.1.2. 個人資料

個人資料は、1階「文書館書庫」に所蔵されている。個人資料として、文書類だけでなく古いタイプライターや机といった備品や、歴代総長の肖像画などが保管されている。

出入り口近くに保管されている木下広次京都大学初代総長の個人資料を例に説明を受けた。個人資料収集については、名誉教授に一斉にハガキを送り資料の提出をお願いしたこともあるそうだが、実際には口コミなどで貴重な資料を得ることが多いという。木下初代総長の個人資料にしても、西山助教授がプライベートの酒席で木下氏の親戚の知人に会ったことから入手できたものである。

個人資料は、2種類の分類番号(資料の最初の所在場所を示した番号と、京都大学大学文書館がつけた整理番号)を貼付した上で資料毎に封筒に入れ、分類番号別の箱に収納される⁽²⁾。

【写真3】



【写真4】



【写真3】 【写真4】 はいずれも木下広次関係資料

1.1.3. 刊行物

刊行物は、2階「文書館書庫」に所蔵されている。ここでは主に京都大学百年史と、京都大学の各部署が発行する刊行物が保管されている。そのほか、他大学の年史も多数収集・保管されている。西山助教授は、京都大学百年史の編集委員として実際に年史編集を経験されているが、編集の際にはこれら多くの他大学の年史を参考にされたという。

また、年史以外にも、大学の歴史・運営・教育研究活動に関わる刊行物については、各大学のものを広く積極的に収集・保管している。これらの刊行物は、大学の歴史研究資料の一部として文書館が収集するものである。配架方法は、京都大学関係の刊行物と他大学のものに2分されている。

2階書庫入り口近くには小さなテーブルが設けられ、内部のミーティングや少人数での簡単なワークショップなどに利用されている。ただし、この書庫は、地下書庫と同じく厨房に隣接しているという、書庫としては不利な条件にある。

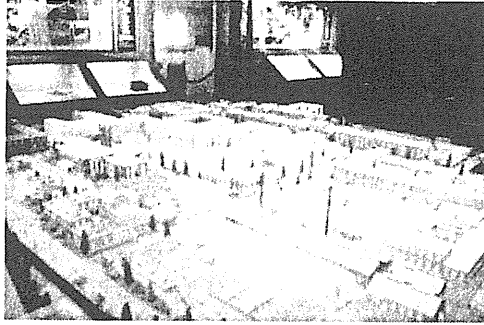
1.2. 展示について

京都大学大学文書館の展示は、常設展「京都大学の歴史」のほか、テーマ展が順次開催される。訪問した際には、歴史展示室においてテーマ展「時計台の昔と今」が開催されていた。

資料の展示には、光による退色、熱による変形などを防ぐよう常に配慮しなければならない。常設展での展示物は、オリジナル資料を守るために模型が使用されている。また、展示に対する説明書きなどにも最新の注意を払うという。戦争・学園紛争・核開発が、特に注意を要する3大事項らしい。実際、OBからの苦情により、湯川秀樹と核開発に関する記述について書き直した経験も一度あるそうだ。展示は不特定多数の目に触れることから、論争が続いているような微妙な話題については特に注意を要する。

また、盗難など安全・防犯上の問題も考慮しなければならない。展示室中央に配置されている、1939年当時の本部構内の再現模型の一部が盗難に遭ったという。この模型は、その大きさから上部をガラスで覆うことがで

きない。展示室横のカウンターにはアルバイト女性が1人配置されているが、常に厳重な監視体制にあるのは事実上不可能である。



【写真5】本部構内の再現模型

1.3. 感想

大学歴史資料アーカイブに関しては、次のように実務面での綿密な準備が必要になる。

- ・ 物理的な場所の確保
- ・ 専任スタッフの確保
- ・ 予算の確保

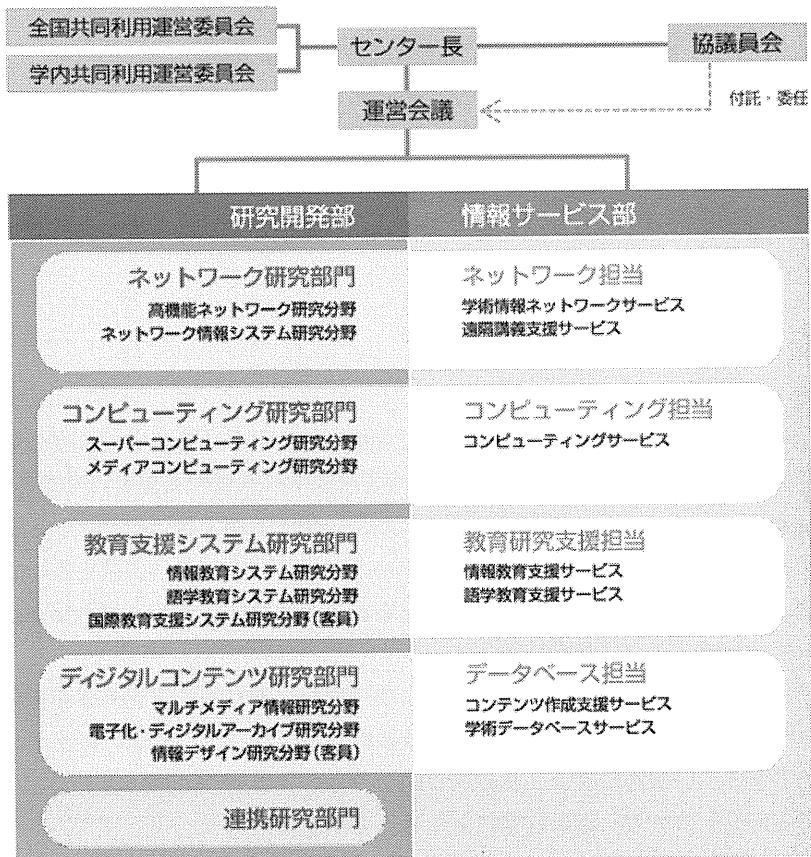
大学内のある特定分野の研究の歴史を扱いたいのか、それとも大学の歴史そのものを扱いたいのか、目的によって収集すべき資料も変わってくる。研究の歴史を扱いたい場合は、歴代の教員に関する個人資料やプロジェクトにまつわる会議資料などの収集が中心となる。一方、大学の歴史そのものが目的の場合は、事務関係資料の収集が欠かせない。京都大学大学文書館の活動は、まさに後者である。

前者の取り組みの一例として、西山助教授から国立国語研究所情報資料部門の活動をご紹介いただいた。比較検討するためにも、今後の視察が必要だろう。いずれにせよ、具体的目的を設定し、実務面における上記3項目を確保した上で、資料収集にあたる必要があるだろう。

2. 京都大学学術情報メディアセンター

京都大学学術情報メディアセンターは、平成14年4月に大型計算機センターおよび総合情報メディアセンターを廃止、統合し設立された。その組織図を【図表1】に示す。教員だけでも約30名を数え、総研大葉山キャンパスに所属する教員数の約3倍という比較的大きな組織といえよう。

【図表1】メディアセンター組織図



京都大学学術情報メディアセンターについては、コンテンツ作成室を最初に訪問し、元木環教務職員より京都大学のコンテンツ作成システムについての説明を受けた。次にデジタルコンテンツ研究部門のマルチメディア研究分野について、角所考助教授より講義のデジタルアーカイブに関する説明を受けた。最後にネットワーク研究部門ネットワーク情報システム研究分野の渡辺正子助手より、京都大学と UCLA が共同で行う遠隔授業についての説明を受けた。

2.1. コンテンツ作成室

コンテンツ作成室では、学内の教員・職員からコンテンツ作成の企画を募集し、その作成を支援するサービスを行っている。具体的には、教員が自らの授業に利用するための映像教材の作成などがあげられる。訪問時には、京都大学大学文書館の西山助教授からの申請により、文書館に展示するための映像を作成していた。コンピュータ・グラフィックなどの視覚芸術・情報デザイン系の専門職員が常駐し、教員と密接なコミュニケーションをとりながら映像として具現化していく。

講義に利用する映像の他に、語学教師などがコンテンツ作成室のスタジオで実際に模擬授業を行い、自分の考える教授法を収録して学会等での発表に用いる場合もある。当日は、フランス語の模擬授業が行われていた。

この室の活動は、現在のところまだ試行段階であり、サービスは始まったばかりであるが、将来的には学外にも広く情報発信していくことを目標としている。

2.2. 講義のデジタルアーカイブ

マルチメディア講義室にて、講義アーカイブの自動作成についての説明を受けた。試行的ではあるが、講義をデジタルアーカイブとして記録し、Web 上で公開する教育支援を行っている。講義で使用する資料は、基本的にプリントでの配布は問題がないとしても、Web 上での公開となれば全く別の問題が生じうる。著作権の問題をさけるために、公開は学内からのア

クセスに限っている。学生にアカウントを発行し、パスワードを入力することにより閲覧が可能である。

講義アーカイブの自動作成は、以下の複数の動きに対応して自動的に同期をとり、記録を行う。

- ・ 教員の両肩に超音波発信器を貼付し、天井に設置したセンサーにて教員の位置をカメラが常時自動追尾する。
- ・ ホワイトボードに記入した内容をそのままデジタル化する。
- ・ パワーポイントなどのプレゼンテーションファイルの画面切り替えを感知する。

ソフトウェアは、(株) 日立アドバンスデジタル社のマルチメディアコンテンツ作成システム「EZ プレゼンテーター」を使用している。

しかしながら、今後の課題も多数存在する。第一に、事後修正の問題である。講義は映像・音声・プレゼンテーションファイル、板書が同期して記録されているので、後から1つの部分のみを修正または消去することが難しい。次に、映像として記録されることに対する、被写体となった人間の抵抗感である。実際、写りたくない学生は1カ所に集めて着席させている。また、写っても良いという学生には、承諾書を取り付けている。第三は、記録する講義の選択である。現在のところ1週約5コマ分の講義を記録・編集・保存しているが、記録する講義の選択は、教員の同意の可／不可により行われている。実際は、口コミで許可が得られた教員の講義からの選択となっている。こういった内容・科目の講義を記録・公開するのが有効であるかは、今後さらに検討を進めていく必要がある。京都大学学術情報センターでは、この問題に対し工学分野と教育学分野の教員が連携しながら日々研究・開発に当たっている。

将来的には、講義をダイジェストで見ることができるよう編集できるようにすることと、学生の顔をカメラにより自動認識し、出席確認を行えるようにしたいということであった。また、先行例としてアメリカ合衆国マサチューセッツ工科大学 (MIT) で行われている MIT OCW (MIT オープンコースウェア)⁽³⁾ を挙げられた。最近では、東京工業大学が MIT OCW コンソーシアムへ参画を表明している。京都大学も同様の構想を考えているとい

うことであった。

2.3. 遠隔講義

1999年から始まった京都大学遠隔講義プロジェクトは、京都大学、UCLA、NTTの共同プロジェクトで、TIDE (Trans-Pacific Interactive Distance Education) プロジェクトと呼ばれている。京都大学とUCLAをATM回線で結ぶことにより、双方の学生が同時に講義を受けることができる。時差があることから、日本側が早朝で先方が夕刻になるなどの問題があるが、学生は時間を調整しながら参加しているということである。

単位については、日本側の学生は日本側の担当教員が認定し、先方の学生は先方で認定している。

実際の講義記録映像(Department of History, UCLAのSharon Traweek 准教授)の一部を拝見したが、時間の関係で十分な話を聞くことができなかった。

2.4. 感想

京都大学メディアセンターの活動は、教員、学生双方の要求を満足させる効果的かつ理想的な取り組みだと感じた。

コンテンツ作成室の活動は、コンテンツ作成技術者と教員が密接に連絡を取りながら教材が作成できる点において非常に効率的であり、また効果的である。教員は自分の理想に近い教材を利用できるので、講義が容易になるなど省力化が図れるといえる。また、視覚に訴える教材は、教育的効果も大きい。

学生側に大きなメリットがあるのは、講義のデジタルアーカイブだろう。病気などで講義を欠席した場合にも、出席した学生と同様のサービスが受けられるという利点がある。講義アーカイブは、貴重な知的財産である。同時に、MITオープンコースウェアのように広く公開していくことができれば、大学の知を広く社会に還元することが可能になる。

総研大では各専攻が地理的に離れていることから、京都大学のようにす

べてをオンラインで行うことは不可能であるが、打ち合わせ作業そのものを遠隔にて行うなど、工夫によっては克服可能であるといえる。さらなる調査・検討が必要である。

《注》

- (1) 京都大学大学文書館ホームページ「目録」『木下広次関係資料』閲覧の手引き (<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/mokuroku.html>)
- (2) 閲覧の申請にあたっては、備え付けの「閲覧請求票」の「資料番号」欄に内容を記入し、カウンターに提出する。論文等刊行物に資料を引用する場合は、該当箇所に、例えば「木下広次関係資料」（京都大学大学文書館寄託）」と明記すること。刊行後は、1部（コピー可）を京都大学大学文書館に寄贈すること。
- (3) MIT OCW (MIT オープンコースウェア)
2001年6月にMITが発表した構想で、MITの2000以上にのぼる講義をすべてインターネットで公開するものである。講義自体を映像で閲覧できるものではないが、シラバス、講義計画、指定図書リスト、課題、そして講義ノートなどの情報がデータベースとして公開されている。URLは以下の通り。
<http://ocw.mit.edu/OcwWeb/index.htm>
また、日本でも2005年5月13日に日本OCW連絡会が発足し、大阪大学、京都大学、慶應義塾大学、東京工業大学、東京大学、早稲田大学の講義情報がインターネット上で公開された。URLは以下の通り。
<http://www.jocw.jp/>